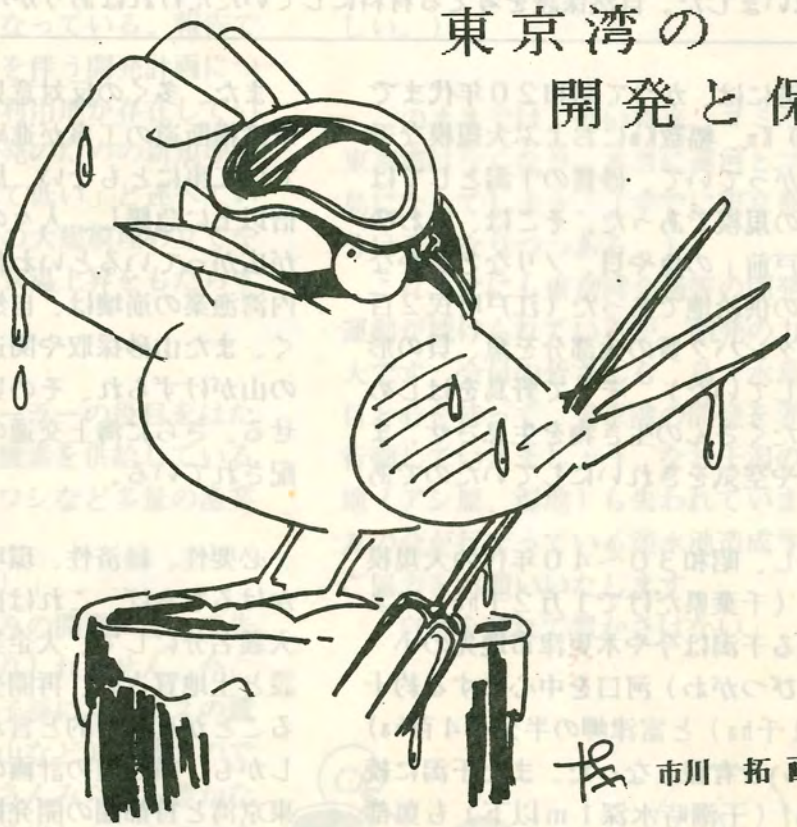
すずがも通信 56号

行徳野鳥観察舎友の会会報　1989年6月1日

特集

東京湾の開発と保全



市川　拓画

[redacted]

特集

東京湾の開発と保全

田久保　晴孝

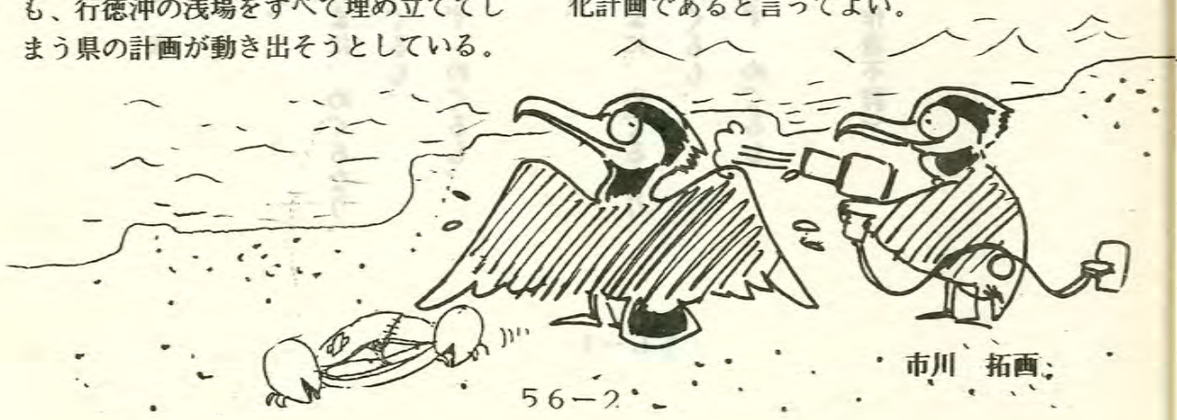
すずがも通信の「特集」は親しみやすい楽しいものにしたいと心がけてきたつもりですが、今回はかなり深刻でかたいものになり、きびしい指摘もあります。目の前にある東京湾の埋立計画が具体的になるという重要な時期、きちんととり上げておきたいと思いました。自然保護を考える材料にしていただければありがたいのですが。

東京湾には、かつて昭和２０年代まで湾岸110 Km、幅数Kmにおよぶ大規模な干潟が広がっていて、砂質の干潟としては日本一の規模であった。そこは、いわゆる「江戸前」の魚や貝、ノリなど豊かな海の幸の供給地であった（江戸町民２百万人のタンパク質の大部分を魚、貝の形で供給していた）。そして野鳥をはじめとするたくさんの生き物を生息させ、また、水や空気をきれいにしていたのである。

しかし、昭和３０～４０年代の大規模埋立て（千葉県だけで１万２千ha）により、残る干潟は今や木更津市地先の小川（おびつがわ）河口を中心にする約十Km²（１千ha）と富津岬の半分（４百ha）だけという有様となった。また干潟に続く浅場*（干潮時水深１ｍ以下）も奥部では船橋・行徳沖と葛西沖にしか残っていない。（*埋立地の造成のときに深い凹地となって失われた。魚の産卵場や稚魚の生育場として大変重要な所）　しかも、行徳沖の浅場をすべて埋め立ててしまう県の計画が動き出そうとしている。

また、多くの反対意見を無視して、東京湾横断道の工事が進められている。すでに工事にともない、周辺の地価が３０倍以上に急騰し、人々の心の奥にも荒廃が広がっているといわれている。そして内湾漁業の崩壊は、自然の崩壊に結びつく。また山砂採取や関連開発により房総の山がけずられ、その豊かな自然を失わせる。さらに海上交通の障害や事故も心配されている。

必要性、経済性、環境破壊をはかりにかけるならば、これは民間活力の導入を大義名分にして、大企業が橋や道路の建設と土地買占め、再開発で三重にもうけることが真の目的と言わざるをえない。しかも、横断道の計画の裏のねらいは、東京湾と首都圏の開発抑制の解除にあるベイ・サイド、ウォーターフロント、人工島などを名のる数十の計画が横断道を引き金に、一斉に胎動しはじめ、そのすべてが東京湾のコンクリートジャングル化計画であると言ってよい。



市川　拓画

３月17日に発表された環境庁の機関の中間報告によれば、東京湾岸地域の開発プロジェクトは昨年４月現在で７３件。このうち事業中や具体的な計画段階のプロジェクトは３９件。羽田空港の沖合展開や、就業人口１１万人、居住人口６万人の副都心を作る計画（１３号埋立地を中心）など、開発対象面積は埋め立てを含め約６千７百haとなっている。報告でも東京湾の埋め立てを伴う開発計画については、「広大な未利用地が存在している状況の下では、開発のための新規埋立ての必要性はきわめて低い」と述べている。とくに、東京湾の大規模埋め立てや超高層ビルは都心の気温上昇をもたらすと予測している。

東京湾は天然のクーラーの役目をはたしているし、多量の酸素を供給しているまた現在でも貝やイワシなど多量の漁業生産量をもっている。

「国富みて山河なし」

経済性や利便等のみの開発によって失われるものは、はかりしれません。今こそ百年先を見通し、子孫にマイナスの遺産（コンクリートの山など）を残すのではなく、水鳥のたくさんみられる豊かな東京湾（湾岸）を造り出したいものです

ゴミの問題一つとっても５年先の見通しも立っていません。平成７年には東京湾にあるゴミ埋立地は満ぱいになると予測されている。私はゴミの減量を本気で行なうと同時に、東京湾に新たにゴミ埋立地を造るのではなく、今ある埋立地をゴミ処理の為につかうべきであると考えている。（湾岸の高層ビル化はやめてほしい。）

このままでは、近い将来、ゴミだけで東京湾はなくなり、本当に運河とゴミの島になってしまう。（すでに東京都の部分はそうなりつつある。）

これまでにも東京湾会議等の開発反対運動が続けられているが、開発の力は巨大です。会員の皆さんも、鳥（水鳥）の目と心を持って、東京湾の開発を考え、行動していきましょう。なお干潟の後背地（アシ原、湿地）も失われています。友の会が行なっている淡水池造成等にもご協力をお願いいたします。

「自然を離れて豊かさはない」

鳥の国から

蓮尾　純子

今年もセイタカシギが卵を産んでくれました！

なにげないこのひと言に、万感をこめたつもりなのですが。とうとう、ようやく、やっとのことで、信じられないことに（？）、卵を産んでくれたのです。

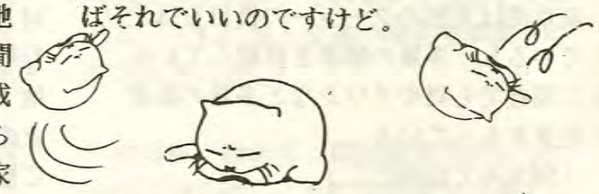
いやあ、まちがいなく産むと思っていたのですよね。昨年、新しい池であれほど続々と巣を作ってくれたでしょう？だから、今年も作ってくれるのがあたりまえだと、誰もが信じきっていたわけです。ところが、ところが。今年は冬にいなくなるということもなく、3月に入ってからは、毎日３０羽近い（同時最大数は３２羽）セイタカシギの群れ（！）が北池またはどぶ池（湊排水機場の遊水池のこと）で見られていました。そして聞き慣れた例のケレッ、ケレッという警戒やなわばり争いの声も、４月なかばから毎晩、わが家ばかりか、金魚池前の東家でも聞かれていました。それなのに、ゴールデンウィークも終わったというのに北川先生の必死の捜索もむなしく、巣ひとつ、卵一個見つかりませんでした。

５月の１０日ともなると、さすがにあせってきます。昨年は４月３０日から営巣、産卵が始まり、親鳥たちの警戒ぶりも相当。ところが今年はいたって平静。タイトルは奪取より防衛の方がずっとたいへんというのがよくわかりました。

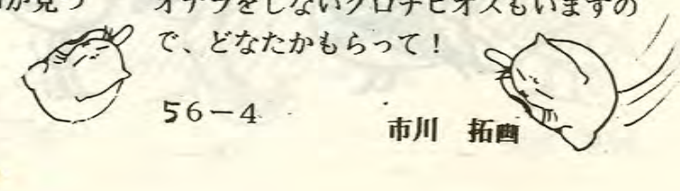
池でつがいを何度か見ましたが、すぐにさっと飛び去り、そのまま帰ってきません。今年はだめか、とあきらめかけたこの日、上池の中央土手よりに新しく作られた島で、まるで産みすてられたように１個だけぽつんところがった卵が見つかったのです。

５月１２日、小ぬか雨の中を、翌日のバードウィーク観察会の下見に出かけました。島にすわっていたセイタカシギがあっさりと静かに飛び去ってしまい、五分後に同じ道を戻る途中にのぞいても姿が見えなかったので、確かめに入ってみました。池にふみこんだとたん、いつの間に帰ったのか、２羽の親鳥が無言のまま飛び立ちました。去年だったらどんなさわぎになったことでしょう。急いで島に近づいて、巣の形がきれいにととのえられ、２個の卵がきちんと並んでいるのを見て引き返しました。

５月１３日現在、上池で１つがいのみが営巣。午後２時ころ、ちょうど3つ目の卵が産み落とされる瞬間を北川先生が観察されました。あとの３０羽はどこでどうしているのでしょうか。元気でいればそれでいいのですけど。



「インドひとり旅」でおなじみの鈴木希伊さんにお願いして、のらしろねこどもの避妊手術（おす１、めす２）を終えました。次に予定していたカスミ嬢、発情の様子など気ぶりにも見せないペチャンコねこだったくせに、手術予定の週から突如おなかがふくれて、４月４日に出産。目下わが家のうちねこは５ひき！こういうことは鳥の国では許されてはいけないのです。おまけにカスミそっくりのミケチビネコは、ガスミと異名をとった母親なみのオナラをするのです。ねこ５＋犬２同居のわが家は環境ビデオのような、というか、発狂しそうな、というかまあ決して退屈しない状態にあります。オナラをしないクロチビオスもいますので、どなたかもらって！



市川　拓画

水車ニュース

今年もまた、新池でユスリカの蚊柱とイトトンボの大群が見られる季節になりました。去年の同じころにくらべると、水が格段にきれいなようです。特にサイフォンから流れ出す「新ウラギク川」の水は澄み切っています。

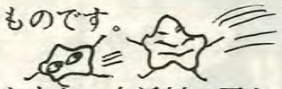
期待のセイクカシギの方はまだ今ひとつというところ。今日（５月１０日）ようやく１つがい、卵１個が確認されたばかり。昨年よりだいぶ遅いようです。無事に育つとよいのですが。

それはともかく、目下「たたみ屋の若だんな」こと鈴木晃夫さんがはりきっていて、この春はもう２回も茨城県境に出かけて、角くん、白石くんなどとカエルを取ってきてくれました。１回目は４月９日で、中くらいの容器にはアマガエルがぎっしり（２４ひき）。道中の負担が少ないように氷で冷やされていたカエルたちは、氷から出されて体が暖まると、急にゲッゲッゲッと鳴きはじめました。

２回目は５月４日。「はい、これ。」とばかりにさし出された容器には、カエルが何と３段に重なっておりました。下積みのカエルは何とか上に出ようとしてじとじと、じわじわとうごめいていて、そのものすごいことといったら。氷がなかったら大惨事。ダルマガエル３８匹、アマガエル２６匹、ヒキガエルとアカガエルが１匹ずつ。ヒキガエルは少し大きい上にふとっているので、かわいそうにいつも下積み。アカガエルがニホンアカガエルなのか、ヤマアカガエルなのか調べようとしたのですが、図鑑にはそれぞれたっぷり１頁ずつの記載があって、おまけにどこがどう違うのか全然書いてない！　あきらめました。

はるばる遠くから誘拐されてきたカエルさんたち、ごめんなさい。新天地での新生活が幸運でありますように。

このほかにバラタナゴ（タイリクバラタナゴ？）やタイコウチも何匹かとってきてくれました。新池には塩気があるため、旧淡水池に放しました。梅雨どきになったらカエルのコーラスが聞こえるかも知れません。あとは、どこかからアカガエルのおつれとシュレーゲルアオガエルを連れてきたいものです。



何日か雨が続いたあと、丸浜川の悪名高い「深み」の部分で、水がすきとおって底まで見えた日がありました。深さはせいぜい３０センチくらい（一番深いところは別）なのですが、これまで一度も底を見たことはなかったのです。大感動しました。底の泥は暗緑色のユレモでおおわれ、硫黄バクテリア（？）で白くなったところもありました。

今年はまだ丸浜川でカダヤシを見ません。でもミジンコはどっさりいます。それも見慣れたタマミジンコ類やカイミジンコ類に加えて、大きさが３、４ミリもある赤いのが目につきます。オオミジンコとかオニミジンコという仲間のようです。

餌場の池のヒキガエルは無事にオタマからカエルに育ったようです。３組ものペアが卵を産んでいたのに、かえったオタマはせいぜい５００匹くらいで、去年よりずっと少なかったのが残念です。このうち何匹がおとなになるのでしょう。

アマガエルとウシガエルの声を時々聞きます。マスクラットも２頭にふえて、心強いかぎり。ザリガニが戻るのもそう先のことではないかも？

新シリーズ

大きな森の小さな訓練校

泰楽　正

その1

木工科44期生31名入校

清水大悟 画

その日は朝から晴れていた。春とは言え、まだ肌寒さの残る上松（あげまつ）技専の校庭の向うには、山頂に残雪をいただいた木曽駒ヶ岳が輝いていた。風が確かに春の息吹を運んでくる。今日は上松技専の入校式である。

上松技専、正確には長野県上松技術専門校は木工科と木材工芸科から成る長野県立の職業訓練校で、毎年多くの木工を志す人たちがやってくる。今年も木工科31名、木材工芸科9名が日本全国からやってきた。もちろん、私もその31名の中の一人である。

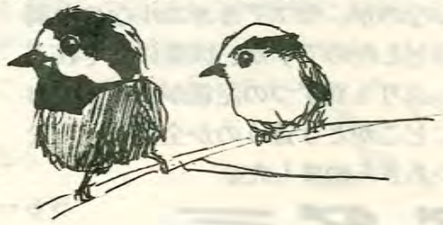
上松町は木曽路の一宿場町で、小さな田舎町だが、付近には日本三大美林の一つ、赤沢の自然休養林があり、かつては森林鉄道が走っていた林業の町である。訓練校は町から歩いて20分程のところにあり、「小川」という名の割には余りにも大きな川のほとりにある。川には岩魚が泳ぎ、キセキレイやカワガラスがいる。校庭からは町の向うに木曽駒ヶ岳が見え、目前の山では、カケス、エナガ、ヤマガラ、ホオジロ、シジュウカラ等が見られる。自然だけは豊かな所です。

私は今日から一年間、この訓練校の寮で寝起きしながら家具製作を学ぶことになりました。これから先、上松の自然の様子や訓練校での生活を皆さんにお伝えしていきたいと思います。

本日、4月4日、上松技専木工科44期生31名入校す。

☆上松の鳥（4月4日～12日）

セグロセキレイ、キセキレイ、ヤマガラ、シジュウカラ、ホオジロ、カワガラス、ヒヨドリ、エナガ、ミソサザイ、トビ、コゲラ、カケス、ハシボソガラス、ウグイス、キジバト、（声）コジュケイ



その2

訓練校の1日

上松技専の朝は、炊事当番のスリッパの音で始まる。僕のいる技専の寮は、寮生による完全自治に近く、朝食の準備から、トイレ掃除まで全て寮生の手で行なわれています。朝7時半からの朝食の後寮内の掃除をしてから、8時20分には全員寮を出ます。そして、訓練校では、朝礼の後、9時から午前中は教室での講義を受け、午前10時半もしくは午後1時からはほとんど実習となっています。

講義の内容は、「工作法」一道具や、家具の作り方、「材料」一木材の特性等「製図」、「安全衛生」といったものです。実習は、まずカンナの研ぎ方に始まり、ノミ等の研ぎ方、角材削り、と進んで、4月末現在は板材削りまで進んでいます。また、週に1回、体育の授業があり、バレーボールとソフトボール（ほとんど遊びです）をやっています。そして午後4時に1日の訓練がすべて終わり、希望者は残業と称して、7時位まで、刃物を研いだり、削り方の練習をしています。その後寮へ戻り、夕食となります。

風呂は週3回で、お湯を入れるのも、翌日の掃除も、寮生の手で行なわれます。

職業訓練校というのは、労働省関連の施設でして、近年、余暇の拡大が叫ばれているところから、隔週休2日となっています。したがって上記のような生活が月～土曜、もしくは月～金曜まで繰り返されています。

休日は洗濯や食事の仕度に追われてしまいますが、それでも暇を見つけては、餌台をつくったり、花の写真をとったり付近の山を散策したりしています。

夜は夜で適当にテレビを見たり、酒を飲んだりして、10時消灯という建前なので、その頃には各自の部屋へ戻り、就寝となります。

以上、訓練校の1日でした。

追伸：土日は休みのことが多いですから暇のある人は週末遊びに来ませんか。先日、オオルリを目の前で30分近くにわたって見ました。カケス、ホオジロ、カラ類はうるさいほどいますよ。

上松の鳥　4月13日～5月7日

ヤマセミ、オオルリ、ホオジロ、キジバト、キセキレイ、シジュウカラ、ヤマガラ、コゲラ、ウグイス（声）、カワガラス、ミソサザイ、キセキレイ、ツバメ（4月末頃より増加）、トビ、カケス、ムクドリ、ハシブトガラス。

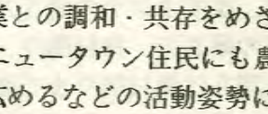
はおと

東　良一

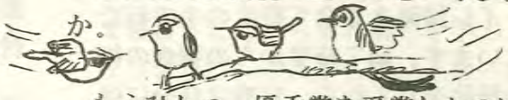
私達、行徳野鳥観察舎友の会が、トヨタ財団の第４回研究コンクールでめでたく最優秀賞を受賞したことは前号でお知らせしました。今回はこのコンクールで受賞を競った他のチームの印象などをお話ししたいと思います。

今回のコンクールの応募件数は１４０件、そのうち２０件が予備研究チームに選ばれ、５ヶ月にわたる予備研究の結果さらにその中から８チームが本研究助成対象に選ばれました。そして２年間の本研究を終え、友の会が最優秀賞を、他３チームが優秀賞を受賞しました。

その中で一番印象的だったのは、石垣島アンパルの研究をしているアンパル野鳥研究会でした。同じように「野鳥」が軸になっていること、また個人的にアンパルを訪れたことがあるため、当初から何となく親しみを感じていました。中間報告会などでは野鳥のスライドなどが発表され石垣島の豊かな自然を楽しませてもらっていたのですが、後半に入り自然破壊がクローズアップされ、新空港建設や土地改良工事の影響が問題にされるようになりました。伐採されるマングローブ林、中でも、干潟のまん中を切り裂くように、両岸をコンクリで固めた水路がのびているスライドには唖然としましたいくら友の会が最優秀賞を受賞したところで、私達がよみがえらせようと努力しているほんの小さな自然の、何倍も大きく、豊かな自然がこうして平然とふみにじられているというのですから。新空港も建設場所を少し変更しただけで自然に与える影響はやはりかなり大きいようです。石垣島では「魚垣の会」というチームが白保を舞台にサンゴ礁文化圏の自然生活誌を研究するというテーマで第５回コンクールの本研究チームに選ばれ研究を続けています。無秩序な開発の及ぼす影響がやっと最近になって地球規模で語られるようになりました。かけがえのない自然を守るため、頑張って欲しいものです。

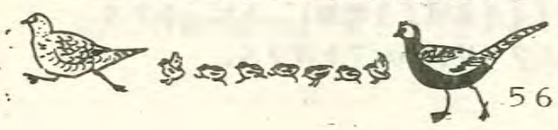


上野・谷中・根津・千駄木の「親しまれる環境」の調査研究をしている谷根千研究会も優秀賞を受賞しました。「身近な環境」というとつい自然環境が頭に浮かびますが、こういったとらえ方もあるのかと感心しました。土地の歴史の研究路地の研究など自分達の町・土地にたいする思い入れがひしひしと伝わってくるのは、歴史と伝統の重みのせいでしょうか。



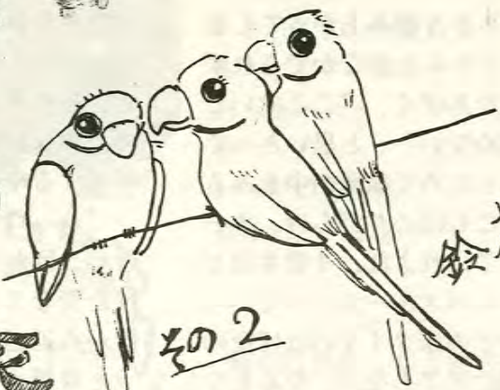
もうひとつ、優秀賞を受賞したのは、八王子の酪農ヴィレッジ研究会です。都市化の中での農業のあり方を研究しているのですが、「都市の中での酪農・農業の存続は都市住民との関わりの中で可能である。」という視点から、酪農と養蚕に焦点を絞り、小学生に農業体験の場を提供するなど活発な活動を続けています都市と農業との調和・共存をめざし、周辺の多摩ニュータウン住民にも農業の存続意義を広めるなどの活動姿勢には学ぶものが多いように思いました。

今回の受賞で第４回研究コンクールもひとくぎりというわけですが、これをきっかけに知り合った日本各地のグループとの交流をこれからも続けていきたいと考えています。



シリーズ

アジア ひとり旅　その２



絵・大希伊

さてさて、いよいよインドへ到着。

飛行機が３時間おくれて、デリー空港に着いたのは夜中の１時。タイとはまた違って、少し冷たいような、湿ったべたっとからみつくような空気。

国際空港ってどこでもキレイなもんだと思ってたのに、なんとデリー空港は砂だらけ、キタナイ。入国審査官はにこりともせず無愛想。インフォメーションカウンターの美しいサリーのお姉さんでさえ仏頂面。日本での営業笑い、顔にへばりついた意味のない笑顔に馴れている私には、それがすごく異様に感じられ、ただでさえ眠くて疲れているところ、さらに疲れて‥‥

おまけに空港内のインド国営銀行（Indian State Bank）でトラベラーズチェックをインド通貨（ルピー、Ｒｓ）に両替しようとしたら、金額はごまかすし、空港を一歩でると、どわっっと客引きタクシー。

が、地獄に仏、で、飛行機内で知り合ったデリー大学に留学中というタイの女の子に助けられ、公営の手頃なホテルを探して行きつくことができました。ところがですねー、そこの窓口でお金を払おうとしたら、受け取れない、というのです。何故かときけば、私が両替証明書を持っていない、というんです。そういえば、インドは証明書がないとお金は使えないんだったっ！！さっき空港内の銀行でもらわなかったったったっ！！

絶望しきった顔、をしてたのであろう私に、窓口のホテルマンは、“ここでもう１回両替すればその金は使える”と。

悪い両替率で再度両替をしてしまったわけです。

翌朝、もうすっかり縮みあがってしまった私は、フトンからなかなかでられずもんもんと考えたあげく、“ここでいじけちゃ、先に進めない”　と思いきっておきあがり、あらためて部屋の中をみると、そこもかしこもほこりだらけ、カーテンは日にやけてよれよれ、４畳半ほどの部屋にトイレ＋バスルーム、っていっても１／２畳ほどの床タイルのはげたのがついてて、間にドアもない、なんとなく臭い‥‥。

とにかく外へ、と思って、出てみればクラクションと排気ガスは、タイよりよっぽどまし。しかし、それは単に車の間に馬車や自転車やたまにゾウやラクダがまじっている、というだけのハナシ、クラクションをならさずに、ただつっこんでいく、というだけのハナシなわけで。

デリーはデリーでも、新市街ニューデリーのそれも中心地、コンノートプレイス、というところに出てみました。たしかに道路はきれいだし、ビルなんかもたってるし、インドの中では、ここは銀座のどまん中、というところ、かしら。しかし、しかし、ですねー。とにかくほこり、砂ぼこり、はだしで歩いてる人々、空をギエッギエッギエッとなきながらとんでくみどり色の大きなインコ、シマリスちょろちょろ、頭が灰色のカラス、ピーポーピーポーと救急車のサイレンのような声でなくムクドリ‥‥

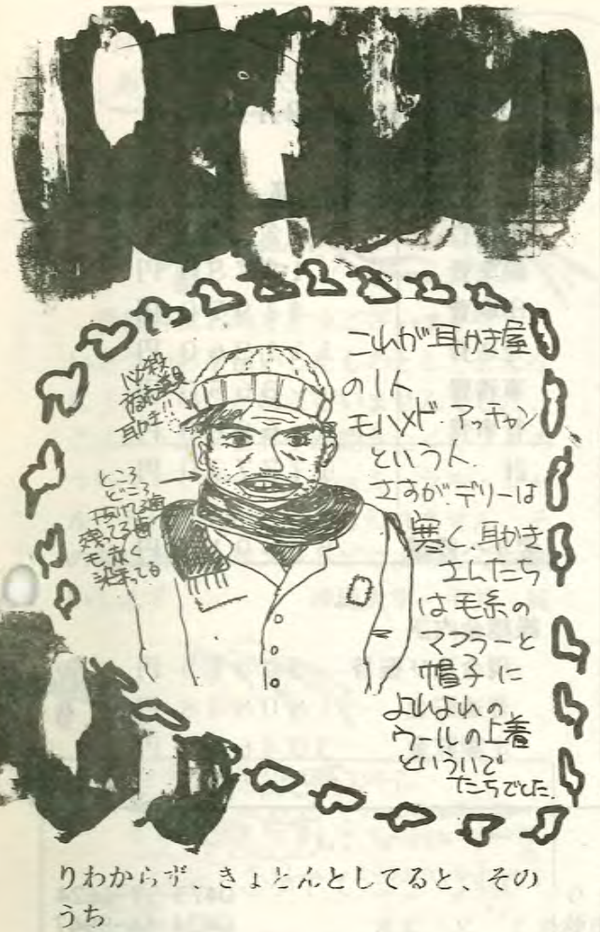
なぜかしらんが、食物をみつけられずおなかぺこぺこ、なんか１人になりたくて、とりあえずコンノートプレイス中心の公園へ行き、芝生に腰をおろして、ほっとするやいなや、

“ハッロォー！！”

というばかでかい声。肩からバックをさげた変な（？）おじさんが、にこにこしながら近づいてくる。一体何者なんだろうと身構えてる私をしりめに、おっちゃんは親しげにべらべらしゃべりつづけ、ねほりはほり私のことを聞きたがり、しばらくすると

“ミミソージ、ミミソージ”

と言いだした　一体何のことやらさっぱ



りわからず、きょとんとしてると、そのうち

“ミミコチョコチョキモチイイネー”

とか言って、耳かきと綿棒をとりだしたげっ！“ミミソージ”って耳掃除のことだったんだ！　仰がせっていると、彼はふところからメモ帳をとりだし、これを読めとページをめくる。見れば日本人の書いたメモ、「この人は、始めに料金を決めておかないと、あとでめちゃくちゃな額を請求されます」とか、「No, Medicine（医薬不要）といわないとめちゃくちゃされますから注意」とか書いてあり、日本語の読めないおっちゃんは、ほらみろ、日本人がここにも書いてある、日本人はみんなきもちいいといっていたおまえもどうだ、と１人で上きげん。

そのうち、耳そうじ人は続々と集まってきて、ついでに靴そうじ屋さんまで集まってきて、みんなで、やれ耳ソージだの、靴なおせ、だの、強引に耳に耳かきをつっこもうとする人やら何やら、

いったいこれは

何なんだ――っ！！

疲れは倍増。もう何でもいい、とにかく帰ろう、とホテルに逃げ帰りました。再びフトンにもぐりこみ、夜中の２時になるまで眠りました。

こうして、インド第１日目は、何だかわけのわからないうちに終わりました。今から思うに、私は、インド拒絶症を示してたわけです。よく、インドに行った人の感想は、「あんなとこ、もう２度と行くもんか！」というタイプと、「素敵なところだ！是非もう１回！」というタイプにはっきり２つにわかれるといいますが、私は前者になりかけていたんですね、実は。

翌日、１２月２２日。デリーは広すぎて、何だかさっぱりわからない、とにかく、もう少し小さい街へ行こう、と、私は計画通りに、まずジャイプールへ行くことにしました。あとはまた次号へ。

希伊ちゃん、インドへ到着。

そこにあるのは、日本とは違った現実とインドなりの大切な価値観。でも日本の生活に慣れた彼女には、相当なショックだったもよう。それでもなお、彼女をひきとどめたものは？　次号をお楽しみに。

１９８８年決算報告

自　1988年　1月　1日
至　　同　　12月31日

収　入　の　部

項　目	金　額
繰越金	478872 円
会　費	214500 円
寄付金	9000 円
利　子	15270 円
計	717642 円

会費内訳　賛助会員　3千円　6名
　　2千円　17名
　　普通会員　千円　141名
　　ジュニア会員　5百円　43名

利子内訳
　普通貯金　2354 円
　定額貯金　12916 円

支　出　の　部

項　目	金　額
編集費	12780 円
印刷費	41970 円
発送費	111260 円
事務費	3650 円
行事費	6900 円
計	177730 円

翌年へ繰越　539912 円

繰越金内訳
　現金及び振替　54415 円
　普通貯金　180848 円
　定額貯金　304649 円

新入会員

[redacted]

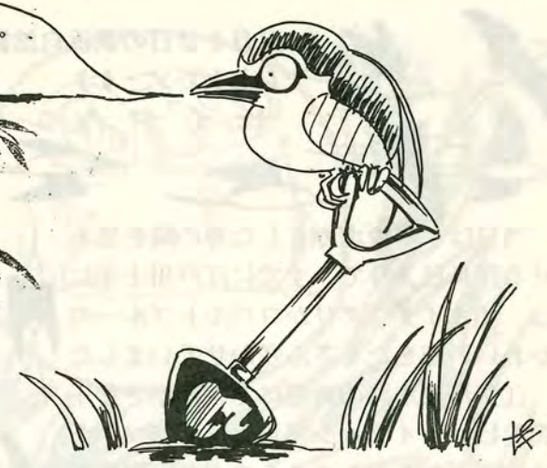
住所変更

[redacted]

訂正

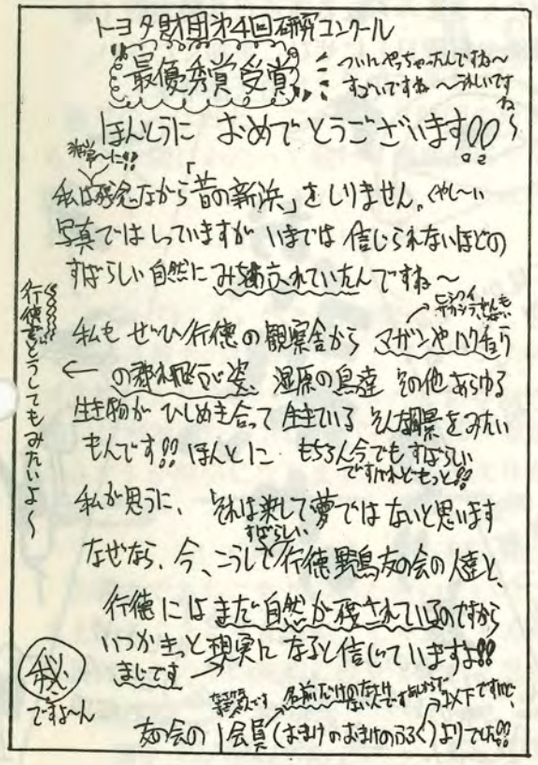
[redacted]

おいわいのおたよりをいただきました。
ありがとうございました。



市川　拓画

最優秀賞おめでとうございます。いささかお手伝いしたものとしてこんなにうれしいことはございませんでした。こういう話を世界中が聞きたくて、そのうちインドからライジュミ・ラル・シャルマという人が行くかもしれません。その時は英語、パンジャビでよろしくお願いします。　沖縄大学　宇井　純



トヨタ財団研究コンクールで最優秀賞を受賞され、おめでとうございます。長期間の努力が実られ、本当に良かったと思います。心よりお喜び申し上げます。

環境問題の解決や監視は少くとも１０年間の調査が必要です。受賞を励みとされ、今後も調査研究を継続され、水質が一層向上し、野鳥にとっても、人間にとっても快適な環境となるよう期待します

東京農工大学　小倉紀雄

毎号楽しい表紙を描いてくださる市川拓さん、バイク事故で入院。

自損事故をやってしまいました。
バイクは大破
本人は足を骨折
今回のイラストは病院で描いています。

間もなく退院とのことですが、くれぐれもお大事に。

2月１２日の新浜自然観察会
はばたけ　３２羽の　セイタカシギ

当日は、ポカポカとした春の陽を思わせる探鳥日よりで、すでに江戸川土手には、オオイヌフグリがコバルトブルーのかわいい花をたくさん咲かせていました

江戸川放水路の両側にできた小さな干潟では、セイタカシギをはじめハマシギオナガガモなどたくさんの水鳥が観察できた。放水路では、２３羽ものセイタカシギが、エサをとったり、休んだりしているのを観察できた。７羽並んで休んでいるグループ、親子３羽でエサをとっているグループ‥‥思ったよりたくさんのセイタカシギに会えてとてもよかった。セイタカシギの重要な越冬地であった妙典のハス田は昨年すべて埋め立てられてしまったので、どこで冬をすごすか心配であった。

特にセイタカシギ成鳥雄の背の青みがかったステキな黒とサンゴ色の長い足に参加者皆が感激していました。

観察会の前日（２月１１日）に保護区内の淡水池に、セイタカシギ繁殖用の島（土の山）を１０コつくりました（行徳野鳥観察舎友の会）。保護区内でみられた９羽と放水路の２３羽、計３２羽のセイタカシギがどこで（どの島で）繁殖するか楽しみです。年々急激な開発（都市化）でその生息地をうばわれている水鳥の為にも、湿地や水たまり、干潟等の保全を訴えていきましょう！　今年も野鳥がたくさんみられる新浜自然観察会（毎月第２日曜日）にぜひご参加ください。

（田久保晴孝）

おいしいゴボウのつくり方

新聞の投書欄でだいぶ前に見かけた記事です。切り抜いておこうと思っているうちにどこかへ行ってしまいました。とてもすてきな内容でしたので、ご紹介させていただきます。

まず、お米の袋（厚手のポリ袋）を何枚か集めます。たまったら、重ねて１つの袋にし、底に少し土を入れ、台所の生ゴミを入れます。こうして生ゴミと土を交互に入れ、だいたいいっぱいになったところで、適当に穴をあけ、ゴボウの種をまきます。ゴボウが育つより早く生ゴミは土に帰り、よい肥料になります。ゴボウが大きくなったら袋を切りひらいて収穫します。とてもやわらかくておいしいゴボウができます。

もとの文章のままご紹介できず、投書された方のお名前もわからず、申しわけありません。ささやかで、きどりがなくって、でも、これ以上はないほどの環境保護の記事だと思いませんか。みなさまの工夫もお教えください。

バンディング情報

３月２９日、保護区では初記録のツリスガラが４羽捕獲され、標識放鳥されました（標識者は原島政巳さん）。セッカくらいのごくごく小さな小鳥で、雄は目のところの黒いすじが特徴。雌はまるでハツカネズミみたいなかわいい顔つきです。アシ原の中で小群をつくって暮らしメジロのような声で鳴きます。九州では冬鳥として定期的に渡来していましたが８０年代に入ってから次第に北上し、昨冬は静岡県などで見られ、今冬には東京や千葉でも観察されています。関東以北で標識されたのは初めてのことです。

すずがも通信、次回の発送は
７月２３日（日曜）
の予定。手伝いにきてね！

おわびと訂正

前号の「はおと」で、トヨタ財団の研究コンクール最優秀賞受賞について「これから１０年間にわたって続けて研究助成を受けられることになった」と書きましたのは誤りで、「これからフォローアップ助成の申請をすることができる」ということです。おわびの上、訂正させていただきます。

今年もやります。「クリーン丸浜川」

夏休み最大の行事（？）、クリーン丸浜川まつり。７月２９日（土）に実施の予定。ゴミ拾い大会や、バーベキューそのほか、楽しくワイワイやりましょう。今年はゴミ拾いに参加された方は、バーベキュー参加費（無料、といいたいところですが、あしからず）が割引になります。詳細は次号をお楽しみに。

「２００１年基金」　スタート！

これまであちこちからいただいていたご寄付を「２００１年基金」としてひとつにまとめることにしました。じゃんじゃんためて、水鳥がいっぱいいる「２００１年の保護区」への夢の実現に役立てたいと思います。どうぞよろしく

野鳥観察舎・長期休館のお知らせ

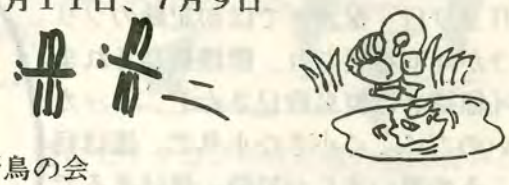
行徳野鳥観察舎の建物全体の改修工事がこの夏に予定されています。工事のため**８月１日から１０月３１日までの３か月間**休館になるとのことです。夏休みや秋の遠足シーズンにかかり残念ですが、新装なった冬に期待したいと思います。くわしくは観察舎までお問いあわせください。

行事案内

誰でも自由に参加できます。参加費無料。

☆定例新浜観察会（毎月第２日曜日）　６月１１日、７月９日

集合：　東西線行徳駅前　午前１０時
解散：　行徳野鳥観察舎　午後３時頃
担当：　東　良一[redacted]
共催：　日本野鳥の会東京支部、千葉県野鳥の会
持物：　昼食、飲み物、バス代（大人３１０円、子供１６０円）



行徳駅からバスで行徳橋へ出、江戸川放水路の土手を水鳥を観察しながら、２㎞ほど歩きます。河口付近で昼食後、午後はバスで保護区へ。かわいらしいヒナ連れのバンやカルガモが見られるとよいですね。小雨決行。

☆定例園内観察会（毎月第１・３日曜日）６月４日・１８日、７月２日・１６日

集合：　行徳野鳥観察舎前　午後１時半
解散：　〃　午後３時半頃
担当：　観察舎　蓮尾
協賛：　友の会

オオヨシキリやセッカの声をききながら、保護区の陸地部分をひとまわりします。歩きやすい服装・はきものでどうぞ。そろそろウミネコもふえてきます。梅雨が明けたら、帽子もお忘れなく。雨天中止。

☆丸浜バードリバーを調べよう　６月２５日（日）、７月２３日（日）

集合：　行徳野鳥観察舎　午前１０時
解散：　〃　午後３時頃
担当：　東　良一[redacted]
持物：　長ぐつ、タオル、ビニール手袋

丸浜川と新池の底泥を採取し、中にいる生物を探します。午後から視聴覚室でソーティング作業をしています。興味のおありの方は、是非お立ち寄り下さい。小雨決行。

編集後記

☆となりの部屋から食卓めがけてだだだだっとかけてきたクロチビオスが、ギャッとひと声。みそしるのなべにとびこんじゃった！さいわい後足の片っぽだけで、すぐ冷やしたためか、やけどはさせずにすんだみたいです。（純）

☆図書室で原稿を書いていたら、会長、事務局長の子供さん達が「一緒にアイス食べよう」と誘ってくれました。霞のかかった午後のひととき、観察舎前の芝生で遊びましたが、何だかとっても楽しかった。またアイスよろしく。（Ｄ）

すずがも通信　Ｎｏ．５６　　１９８９年６月１日発行
発行所　行徳野鳥観察舎友の会　　年会費　一般1000円、ジュニア500円
発行人　東　良一[redacted]
事務局[redacted]
編集　清水大悟、蓮尾純子　　編集協力　東　馨子、市川　拓、尾田信介
行徳野鳥観察舎[redacted]